

# 地軸

「答えがないことがこの会の結論。共に悩み、その

時々には最善と思える答えを出し続けるしかない」。在宅医療のシンポジウムは、さながら哲学教室だった▲日本在宅医学会の15回目の全国大会が松山で開かれた。自宅で最期まで生きることを支える在宅医療介護の担い手3千人が参加。揺れ動く患者・家族の心情と、一人一人違う「正解」に寄り添うまなごしは温かく、心励まされた▲「現代医療は『待てない医療』。終末期は治療を控え、自然な衰えを共に待つことが大事」「誰もが立派な死でなくてもいい。その人らしく『それなりの人生だった』と思えるように支えたい」。結果より対話、過程を重視する姿勢は、大会テーマの「生き方に向き合う在宅医療」そのものに初めて自宅より病院で「くくなる人が多くなり、今は病院が8割。わずか40年前まで身近だった死も在宅医療も遠く、見えにくくなった。最期をどう過ごすかは、誰も避けて通れない大切な問いなのに▲昨年、胃ろうなどの人工栄養や人工透析について、各学会が「中止もあり得る」との指針を初公表した。「治す」「辺倒の医療から「治らなくても、支える」医療へ。転換期の今、在宅医療の役割は大きい▲「やり残し、言い残し、食べ残しがないように」とは大会での名言。まずはそんな気持ちで今日を、明日を重ねていこう。